

家政学(経験的実践科学)における「実践性」——「家政学原論研究」  
の今日の課題——  
福岡市教委 平田 昌

〔問題の所在とその解析〕 「家政学原論」およびその「研究」の歩みは、家政学の歴史とともにあり、既に40年を経ている。研究部会も、20年を数え、研究者層も年代的継承が実現しつつあり、それなりの発展様相がある。一方、「家政学将来構想'84」は、「家政学の基礎的共通解明としての「家政学原論」の必要と重要性は大きく認めるが、「原論研究現状の学問的未成熟性」にはきびしい批判を示している。また「学会40周年記念特集家政誌(1988 VOL.39, No.5)は、「21世紀家政学ビジョン創出における原論の責務をうたう(P.503)とともに、「学的未整備課題の存在」を示し(P.502)している。筆者は家政学原論研究の立場から、「構想'84」については若干の意見開陳を試みた(部会報No.19, 家政誌1985, VOL.36, No.6)。数年を経た今日、なお問題視される諸点については、その解決のために「問題直視」の必要があり、「原論研究」はもともとより家政学全般の研究が、拡散的、縦断的、個別的な方向にのみ進むのではなく、求心的、連携的、相補的方向を求め、共通理解成立のための整備とその累積をはかることの重要性を思うものである。今日、家政学と「経験的実践科学」とみることの字句表現的理解は、ほぼ共有されている。問題は、その理解が内容的、本質的、具体的に「共有性」を得られるか否か、家政学としての共有基本視点を明確に位置づけでの探究累積がなされていくか否か、であろう。ここでは、それらの諸点への一つの解明として、家政学における「論理性」と「実証性」と「実践性」の科学的位置づけの明確化と具体化を、事例資料を通しての論展開において試みる。